

多賀城市文化財調査報告書 第25集

年報 4

平成元年度

平成2年3月

多賀城市埋蔵文化財調査センター

序

当埋蔵文化財調査センターも、本年で開館以来3年目をむかえることができました。この間多くの方々の御指導、御協力により、埋蔵文化財の発掘調査、資料の収集・保存・整理及び展示公開事業といった、当センターの主な活動もようやく軌道にのり、各面でそれなりの成果をあげるに至っています。

さて、今年度の各事業についてみると、まず遺跡の発掘調査においては6件の調査件数を数え、ここ数年続いている調査件数の増加傾向には今年も歴止めがかかりませんでした。したがって、限られた職員数と調査期間の中で臨まざるを得なかった今年度の各調査は、発掘調査本来のあり方からみれば必ずしも望ましい姿とはいえないと思います。しかしながら、各調査においてそれぞれ見るべき成果をあげることができたことは、多くの問題点を内包しているとはいえ、まずは喜ぶべきことだと考えています。この年報中では、これらの調査成果は概略的な記載にとどめており、詳細については今年度中に刊行する各調査ごとの報告書で紹介することにしています。

次に資料の展示・公開の面では、今年度は3回目をむかえる企画展を開催したほか、昨年度の発掘調査成果をまとめた速報展と多賀城廃寺の寺名についての特別展を実施することができました。いずれも当センターで行った発掘調査の成果をもとにしたもので、この意味では調査機関が行う展示といった特色を、充分生かせた内容であったのではないかと考えています。

また、特別史跡多賀城跡及び多賀城廃寺の発掘調査開始30年目を記念して開催した坪井清足先生の講演会では、500名を越える多くの来場者をむかえることができ、改めて市民の皆さんの史跡に対する关心の深さを感じることができました。このような催しが、現在多賀城市が推進している多賀城跡復元計画の実現にむけて、多くの方々から御理解と御協力を賜わる一助となれば幸いです。

最後になりましたが、今後とも事業内容の一層の充実に努めていく所存でありますので、日頃御世話いただいている多くの皆様の変わらぬ御指導と御助言をよろしくお願い申し上げます。

平成2年3月

多賀城市埋蔵文化財調査センター

所長 斎藤一司

例　　言

- 本書は、多賀城市埋蔵文化財調査センターが平成元年度に行った埋蔵文化財の調査報告と各種事業について、概略的にまとめたものである。
- 各種事業報告は担当者が執筆し、また調査報告については下記の資料をもとに、各調査担当者の指導をうけて、今年度の年報担当が加筆、編集した。

市川橋遺跡第7～9次調査…………平成元年度宮城県内発掘調査成果発表会資料

山王遺跡第8次調査……………*

山王遺跡八幡地区調査……………*

新田遺跡第11次調査…………現地説明会資料

- 本書に収録した各調査の本報告書は、平成2年3月に刊行予定である。なお、山王遺跡八幡地区調査については、宮城県教育委員会により概報が刊行される。

本　文　目　次

序　文

例　言

I 調査報告……………	1
1. 市川橋遺跡第7次調査………2	2
3. 市川橋遺跡第9次調査………6	4
5. 山王遺跡八幡地区調査………10	8
7. 西沢遺跡試掘調査………14	12
II 平成元年度埋蔵文化財包蔵地内開発協議一覧……………	15
III 事業報告……………	16
1. 展　示……………	16
2. 善普及活動……………	23
IV 事務報告……………	24
V 講演会報告……………	25

I 調査報告

1. 平成元年度に実施した発掘調査の概略は次のとおりである。

地図番号	遺跡名	所在地	調査期間	調査面積	原因	担当職員
①	市川橋遺跡(第7次)	多賀城市浮島字高平34・35	平成元年4月20日～7月7日	900m ²	宅地造成	石川
②	・(第8次)	・高崎字水入46-2	・5月15日～7月14日	434m ²	・	滝口
③	・(第9次)	・浮島字高平14	・9月18日～12月25日	480m ²	・	滝口、千葉
④	山王遺跡(第8次)	・山王字東町浦47他	・4月7日～7月22日	1,620m ²	・	相沢
⑤	・(八幡地区)	・南宮字八幡地内	・7月1日～12月14日	7,000m ²	仙塙道路建設	石川、石本
⑥	新田遺跡(第11次)	・山王字北寿福寺19-2	・4月17日～9月30日	5,185m ²	宅地造成	千葉
⑦	西沢遺跡(試掘)	・浮島字沢前7	・10月16日～10月20日	27m ²	市営住宅建替	相沢



調査区位置図

2. 調査補助員

菊池 豊、佐藤 智雄、井口 純二

3. 臨時技能員(発掘作業員)

芦野しす子、大友 良子、加藤 文一、阿部 米子、阿部 敏子、阿部美智子、熊谷あつ子、小野 玉乃、阿部美津子、熊谷きみ江、後藤 恵子、渡辺ゆき子、後藤はつみ、千葉 享一、桜井エイ子、佐藤 篠子、赤間かつ子、菅原 朝代、高野 敏子、松本 喜一、角田 啓子、遠藤 一代、渡辺 國恵、熊谷 好子、佐々木四郎、松浦 正、水越 良子、星 忠次郎、下道 博信、阿部トシ子、相沢 仁子、鈴木 一郎、佐藤 容子、後藤みよ子、大山 貞子、菅野 恵子、阿部けい子、佐々木忠志、大場 正司、菅野 文夫、加藤 昭一、水越 朝治、武田 りき、渡辺 幹子、末永たみ子、堀越のぶ子、高島 篠子

4. 臨時技術員(遺物整理員)

佐藤 悅子、柏倉 露代、須藤美智子、熊谷 純子、黒田 啓子、木村 梅子、平山 篠子、小野寺恵子、斎藤 珠江、米澤 栄子、林 久子、山田 紀子

1. 市川橋遺跡第7次調査

- (1) 所在地 多賀城市浮島字高平34・35
- (2) 調査期間 平成元年4月20日～7月7日
- (3) 調査面積 900m² (対象面積2,000m²)



調査区位置図

(4) 位置と環境

市川橋遺跡は、多賀城市内を南北にほぼ二分して流れる砂押川によって形成された自然堤防上に立地している。本遺跡は特別史跡多賀城跡に接し、その西側と南側一帯の水田部に南北1.6km、東西1.4kmの広範囲にわたって占地している。近年、本遺跡の包蔵地内では小規模な開発が行われ、これに伴い発掘件数も増加している。過去の調査では、平安時代を中心とする建物跡、井戸跡、溝跡、水田跡などの遺構が発見され、さらに遺物の出土量も多い。こうしたことから、本遺跡は国府多賀城を取り巻く大規模な集落を構成する遺跡の一つとして、いわゆる国府域を考える上で重要な位置を占めている。

(5) 発見された遺構と遺物

〈遺構〉

水田跡3面、井戸跡2基 土塁21基 溝跡13条 小ピット群 整地

〈遺物〉

土師器（杯・甕） 須恵器（杯・高台付杯・甕・壺・瓶・双耳杯） 灰釉陶器 緑釉陶器
瓦（平瓦・丸瓦） 研（円面研） 木製品（曲物・絵馬） 漆紙文書 他

(6) 調査概要

今回の調査では、平安時代の水田跡3面を確認した。いずれも灰白色火山灰降灰以前に作られたもので、このうち調査区西側で検出した水田跡からは多量の遺物と共に須恵器杯に付着した漆紙文書が出土した。これは多賀城周辺遺跡では初めての出土例で、内容について現在検討中である。またこの水田跡と併行して機能したと考えられる溝跡も検出した。この他、曲物を2段重ねて据えた井戸跡と側板を持った井戸跡を発見した。さらに土城の一つからは、土器や木製品とともに絵馬が出土している。

発見された遺構は、水田跡に示されるように生産に係わる遺構が主体となるが、北側に整地が認められ井戸跡等も存在していることから、この周辺部も生活空間として利用されたことがうかがえるのが特徴である。これらの遺構の年代については、出土遺物より見ておおむね9世紀代と考えている。



調査区全量(西より)



井戸跡内曲物出土状況

2. 市川橋遺跡第8次調査

- (1) 所在地 多賀城市高崎字水入46-2
- (2) 調査期間 平成元年5月15日～7月14日
- (3) 調査面積 434m² (対象面積925m²)



調査区位置図

(4) 位置と環境

本調査区は、市川橋遺跡内の北東隅に位置する。東側の高崎丘陵上には、多賀城の付属寺院である多賀城廃寺が立地している。また、廃寺跡を取り巻くように高崎遺跡が広く丘陵部を占地しており、同丘陵西端部分には丸山圓古墳群が所在している。さらに、本調査区に近接する箇所で実施された過去の調査についてみると、北側の微高地上に位置する高平遺跡から平安時代の掘立柱建物跡や竪穴住居跡などが発見されている。また、北西側に隣接する水田部で行われた市川橋遺跡第4・6次調査では、平安時代の溝跡等が発見され、多量の木製品や墨書き土器が出土している。

(5) 発見された遺構と遺物

〈遺構〉

掘立柱建物跡4棟 土塁7基 溝跡28条 水田跡 整地 その他柱穴多数

〈遺物〉

土師器（杯・甕・耳皿） 須恵器（杯・高台付杯・双耳杯・甕・壺） 赤焼き土器（杯・高台付杯） 灰釉陶器（碗・水注） 緑釉陶器 青磁 瓦（軒丸瓦・平瓦・丸瓦） 研（円面鏡・風字硯） 土製カマド 土鍤 木製品（碗・皿） 他

(6) 調査概要

今回の調査で発見された整地は、大きく2時期に分けられる。第Ⅰ期は灰白色火山灰降灰以前で、主に調査区東側の湿地帯及び水田を整地しており、掘立柱建物跡や溝跡等はこの整地面で検出している。第Ⅱ期は灰白色火山灰降灰以後で、調査区西側の水田を整地している。

これらの遺構の年代については、出土遺物よりみて9世紀中頃から10世紀前半と考えられる。なお、当地区は高平遺跡や丸山団古墳群が所在する低丘陵の西側裾部の低湿地帯に当たり、さらに第4・6次調

査においても居住地域が発見されなかつたことから、この周辺の湿地帯には遺構が存在しないであろうと考えられていた。

しかし、今回の調査で確認できたように低湿地帯に整地事業を行い居住地域を広げて利用していることから、これまで考えられてきた多賀城周辺の土地利用について検討する良好な資料を得た。

出土遺物は平箱で約60箱を数え、この中でも須恵器の出土量が最も多い。また墨書き土器が数十点出土している。



調査区東半部（西より）



墨書き土器「方」出土状況

3. 市川橋遺跡第9次調査

- (1) 所在地 多賀城市浮島字高平14
(2) 調査期間 平成元年9月18日～12月25日
(3) 調査面積 480m² (対象面積1,020m²)



調査区位置図

4) 位置と環境

本調査区は、今年度に実施した第7次調査区の西側に隣接した水田部に位置する。また、昭和59年度に実施した第5次調査区は、この南側に隣接する。第5次調査においては、古代から近世にかけての水田跡や居住地域を拡大するための整地層のほか、掘立柱建物跡や柱列を検出している。さらに、道路を隔てた南側の水入地区では、昭和54年に宮城県教育委員会による調査が行われ、平安時代前半を中心とした時期の遺構・遺物が発見されている。

5) 発見された遺構と遺物

〈遺構〉

掘立柱建物跡4棟 土塙6基 溝跡10条 水田跡 整地 その他小溝跡、柱穴多数

〈遺物〉

土師器（杯・高台付杯・甕・耳皿） 須恵器（杯・高台付杯・双耳杯・甕・壺） 赤焼き
土器（杯・高台付杯） 灰釉陶器（碗・耳皿） 緑釉陶器 青磁 瓦（軒平瓦・軒丸瓦・
平瓦・丸瓦） 砥 磁器 カマド 土錐 木製品（椀・皿・曲物） 銅帶金具

(6) 調査概要

今回の調査では、第7・8次調査と同様水田として利用された地域に整地事業を行い、居住地域を広げて利用していることを確認した。この整地は大きく3時期に分けられ、造構は一番古い時期の整地に伴うものが多い。造構の年代については、出土遺物からみて9~10世紀前半と考えられる。

出土遺物は平箱で約120箱を数え、このうち須恵器の出土量が最も多い。また、一般庶民では手に入らない綠釉陶器、灰釉陶器が出土していることから、多賀城との強い関連性がうかがわれる。



右　調査区全景
(西より)

左下　調査区東半部
(北より)

右下　遺物出土状況



4. 山王遺跡第8次調査

- (1) 所在地 多賀城市山王字東町浦47他
- (2) 調査期間 平成元年4月7日～7月22日
- (3) 調査面積 1,620m²



調査区位置図

(4) 位置と環境

本遺跡は、古墳時代から近世にかけての大規模な集落跡であり、旧七北田川と砂押川によって形成された自然堤防上に立地している。過去の調査では当該地の西側で第4次調査を実施しており、古墳時代の溝跡・土塙、古代の道路跡・掘立柱建物跡・井戸跡・土塙等を発見している。特に古代については、両脇に側溝を伴った東西方向に走る幅10数メートルの道路跡と、その北側では重複する数棟の建物跡を検出し、多賀城周辺地域における集落のあり方について興味深い資料を提供することになった。また土塙からは「観音寺」と墨書きされた土器が出土しており、多賀城廃寺の寺名として注目されている。

(5) 発見された遺構と遺物

〈遺構〉

道路跡 掘立柱建物跡 3棟 溝跡33条 井戸跡 4基 土塙 5基 木組み遺構 他

〈遺物〉

土師器 須恵器 赤焼き土器 緑釉陶器 白磁 瓦 研 土製カマド 木製品(曲物容器・盤・漆器椀・斎串) 鉄製品(鉄斧) 石製模造品 植物遺体(銀杏・桃・椿の種子・根)
昆虫の羽根 他

(6) 調査概要

今回の調査で発見された遺構は、古墳時代と古代のものに大別できる。

古墳時代の遺構は、古代の遺構の確認面となっている砂層を約1m掘り下げる発見した。7列の杭列と、それに組む横木を検出しておらず、幅1mの間隔で弧状にめぐらせており。この木組み遺構については、堰あるいは堤防状遺構と考えられる。なお、砂層中には縄文土器、弥生土器、土師器（塙釜・南小泉式期）、須恵器、石製模造品などの遺物が含まれ、形成された時期は南小泉式期（5世紀）と考えられる。

古代の遺構には道路跡、掘立柱建物跡、井戸跡等がある。

道路跡は路幅約12mを計る東西道路と、路幅約3mを計る南北道路を検出した。両者は素掘りの側溝を両側に伴っており、調査区東側で接続している。側溝には4時期の変遷があり、年代は9～10世紀頃と考えている。

第4次調査区でも同様の道路跡を検出しておらず、今回の調査分を合わせると長さ約150m以上にわたって検出したことになる。また、方向は多賀城外郭南辺築地の方向とほぼ一致している。これらのことから、本遺跡周辺は国府多賀城の規制を受けた計画的割りが行われていた可能性がさらに強くなつた。

掘立柱建物跡は南北道路の東側で3棟検出している。このうち2棟は東西2間、南北2間の縦柱建物で倉庫跡と考えられる。他は東西4間以上、南北2間の東西棟で、一度建て替えられている。

井戸跡は4基検出しており、いずれも東西道路の北側に位置している。これらには井戸側を持つものや、底面に曲物がすえられたものがある。



調査区全景（南より）



井戸跡内曲物出土状況

5. 山王遺跡八幡地区調査

- (1) 所在地 多賀城市南宮字八幡地内
- (2) 調査期間 平成元年7月1日～12月14日
- (3) 調査面積 7,000m²



調査区位置図

(4) 位置と環境

本遺跡は、多賀城市山王及び南宮を中心とする東西約2km、南北約1kmの広範囲にわたる遺跡である。今回の調査区は本遺跡の北東隅にあたり、付近の標高は約4mである。

今回の調査は、建設省東北地方建設局による仙塩道路建設にかかるもので、宮城県教育委員会と多賀城市教育委員会が共同で調査を行った。なお、本調査に先だって昨年度に行われた東側隣接地での確認調査では、掘立柱建物跡や道路造構の他、下層から古墳時代後期・中期初頭、縄文時代の造構や遺物が発見された。

(5) 発見された遺構と遺物

〈遺構〉

道路跡2条 掘立柱建物跡22棟以上 穫穴住居跡4軒 井戸跡6基 鎏棺墓2基 獣状造構18面 溝跡124条以上 土塙90基以上 墓跡8基 河川跡 柱穴多数

〈遺物〉

土師器 須恵器 赤焼土器 陶磁器 瓦 鉄製品 銅製品 土製品 石器 石製品 古錢
木製品 人骨 獣骨

(6) 調査概要

今回の調査で検出された遺構の年代は、古代、中世、近世に大きく3区分できる。

古代の遺構としては、平安時代の南北道路と東西道路が見つかり、調査区中央で交差する。

両道路跡は3時期の変遷があり、ほぼ同位置で側溝の作り替えが行われている。この道路跡と多賀城周辺地域でこれまでに検出された道路跡との間には、方向や距離に関連性が強く認められる。したがって、従来指摘されてきたように多賀城周辺に計画的な地割がなされていたことを裏付けるような成果が得られた。他の遺構については、掘立柱建物跡と竪穴住居跡は奈良時代に位置付けられるものが多く、また井戸跡には木組の井戸枠を据え、最下部に曲物を埋め込んだもの

も検出されている。

さらに自然のくぼみから、解体した後に一か所にまとめて捨てられたと推定される多量のウマの骨が一括して出土している。年代はこれらとともに出土した土器から奈良時代に位置付けられる。

中世については、方形の堀を巡らした星敷跡が検出され、敷地内からは掘立柱建物跡と井戸跡等が見つかっている。堀は西辺で4時期あることがわかり、西側へ徐々に敷地面積を拡大していくようすがうかがわれる。



調査区全景（北より）



馬骨出土状況

6. 新田遺跡第11次調査

- (1) 所在地 多賀城市山王字北寿福寺19-2
- (2) 調査期間 平成元年4月17日～9月30日
- (3) 調査面積 5,185m² (対象面積7,000m²)



調査区位置図

(4) 位置と環境

新田遺跡は、多賀城市的西端部に位置し、西側を流れる七北田川によって形成された自然堤防上に立地している。本遺跡における考古学的調査は昭和39年の西後地区の調査に始まるが、昭和57年以後は寿福寺地区に調査が集中している。その結果、古墳時代前期から江戸時代に至る各時代の遺構を発見しており、しかも一つの地区を広く調査したことによって、各時代の様子が次第に判明しつつある。特に中世の遺構については、大規模な武士の館が次第に全容を現わしつつあり、当時の生活を再現する上で貴重な資料を提供すると言える。

(5) 発見された遺構と遺物

〈遺構〉

掘立柱建物跡 6棟 柱列跡 1条 井戸跡 63基 土塁 22基 溝跡 24条 道路跡 2条 河川跡 1条

〈遺物〉

古代一土師器(杯・甕・壺) 須恵器(杯・瓶・甕) 赤焼き土器(杯) 灰釉陶器(平瓶) 緑釉陶器(皿)

中世一青磁・白磁（楕・皿・合子） 鉄釉陶器（壺） 施釉陶器（壺） 無釉陶器（大甕・壺・擂鉢） カワラケ 土鍋 木製品（油物容器・柄杓・杓子・折敷・漆器・箸状木製品・把手・板草履・下駄・刀子形木製品・将棋駒） 竹製カゴ キセル 古錢 鉄鎌 破石 獣骨 植物遺体（モモ・モミガラ） 人（？）の顔を描いた石

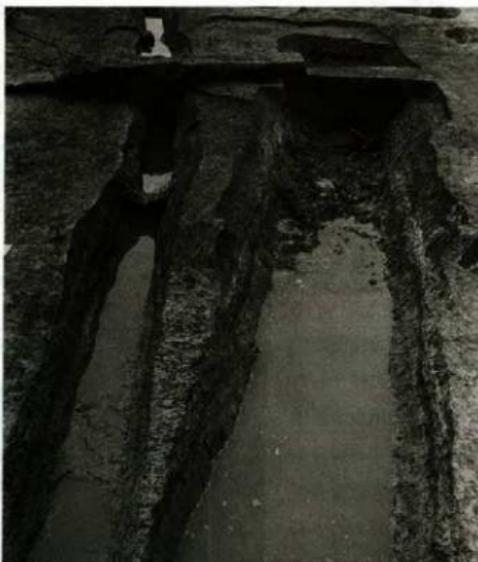
(6) 調査概要

今回の調査では、古墳時代、平安時代、中世、近世の遺構・遺物を発見した。

平安時代の遺構では、第5・6・8次調査で検出した道路跡の南の側溝を発見した。また、その南側では、この道路跡よりも新しい溝跡2条を発見した。これらはほぼ平行して延びていることから、新しい段階の道路跡の側溝となる可能性がある。

中世の遺構は、掘立柱建物跡や多くの井戸跡を発見した。今回の調査区は、西側で発見されている大規模な武士の館と東側の小規模な武士の館にちょうどはさまれた地域にある。調査の結果、主体的な居住の場とはみられないまでも、多くの井戸や小規模な建物のつくられた生活空間であったことが判明した。

出土遺物は、木製品の出土量が圧倒的に多く、特に板草履は鼻緒やワラの残っている良好な状態のものが目立つ。



遺構掘り込み状況（西より）



竹製カゴ出土状況

6. 西沢遺跡試掘調査

- (1) 所在地 多賀城市浮島字沢前7
(2) 調査期間 平成元年10月16日～20日
(3) 調査面積 27m²

(4) 位置と環境

西沢遺跡は、特別史跡多賀城跡の東側に隣接する。包蔵地内には土師器、須恵器、瓦等が散布するが、これまでのところ本格的な調査は実施されていない。本調査は市営住宅建て替え工事に伴うもので、当該地が多賀城跡外郭東辺に近接することから試掘調査を実施したものである。

(5) 調査概要

調査にあたっては住宅敷地内の西端と北端の空地2ヶ所に試掘坑(トレンチ)を設定した。調査の結



調査区位置図



調査風景

果、両者ともほぼ対応する層位であることを確認した。層序は第Ⅰ層が住宅建設の際の盛土、第Ⅱ層が盛土前の水田耕作土である。第Ⅲ層は約10～20cmの厚さを計り、下面に灰白色火山灰が自然堆積していることから、古代の堆積層と考えられる。第Ⅳ層は粘土層から植物遺体を含む層に変わる漸移層である。第Ⅴ層は純粹な植物遺体の層で、所謂スクモ層である。なお、各層の上面では遺構は検出されなかった。遺物は、第1トレンチ第Ⅲ層より瓦と土師器甕の破片が数点出土しているのみである。

Ⅱ 平成元年度埋蔵文化財包蔵地内開発協議一覧

番号	道路名	所在地	開発内容	申請者	協議提出月日	回答年月日	回答内容
1	山王通路	多賀城市 山王字東山浦地内	公共下水道工事	多賀城市長 伊藤喜一郎	平成元年 6月21日	平成元年 7月24日	57条の3提出 立会い調査
2	新田通路	多賀城市 新田字上、郷西地内	*	*	*	*	*
3	*	多賀城市 新田字郷西、南安斎寺地内	*	*	*	*	*
4	*	多賀城市 新田字郷西、北安斎寺地内	*	*	*	*	*
5	山王通路	多賀城市 南宮字町地内	*	*	*	*	*
6	*	*	*	*	*	*	*
7	市川横道跡	多賀城市 高崎字橋の口17	個人住宅 (300.75m ²)	仙台市泉区南光台7-6-8 廣平昭雄	平成元年 6月28日	平成元年 7月15日	埋蔵調査後 発掘調査を要しない
8	*	多賀城市 浮島字高7-3	個人住宅 (505.90m ²)	坂東市みのが丘2-2 鈴木 順雄・鈴木 中雄	平成元年 7月7日	平成元年 7月12日	発掘調査終了済 発掘調査を要しない
9	新田通路	多賀城市 新田字西、北安斎寺、郷西	水道工事	多賀城市長 伊藤喜一郎	平成元年 7月22日	平成元年 7月28日	57条の3提出 立会い調査
10	*	多賀城市 新田字西地内	*	*	*	*	*
11	高崎通路	多賀城市 高崎二丁目地内	*	*	*	*	*
12	*	多賀城市 北崎二丁目地内	公共下水道工事	*	平成元年 7月31日	平成元年 8月8日	*
13	山王通路	多賀城市 山王字中山王、山王西園	*	*	*	*	*
14	*	*	*	*	*	*	*
15	桜本園貝塚	多賀城市 大代五丁目9-21	宅地造成 (1,450m ²)	多賀城市高崎字花の木88 櫻田 建設	平成元年 8月25日	平成元年 8月31日	地下構造の削除なし 発掘調査を要しない
16	高崎通路	多賀城市 高崎二丁目地内	水道工事	多賀城市長 伊藤喜一郎	平成元年 9月18日	平成元年 9月23日	57条の3提出 立会い調査
17	高崎通路	多賀城市 浮島字高原地内	水道工事	配水管整備工事	平成元年 11月6日	平成元年 11月16日	*
18	新田通路	多賀城市 南宮字便中地内	水道工事	配水管整備事業	*	*	*
19	高崎通路	多賀城市 高崎二丁目地内	*	*	平成元年 11月16日	*	*
20	高崎通路	多賀城市 浮島字高原地内	公共下水道工事	*	平成元年 11月8日	*	*
21	高崎通路	多賀城市 新田字北安斎寺、西地内	*	*	*	*	*
22	新田通路	*	*	*	平成元年 11月11日	平成元年 11月27日	*
23	*	多賀城市 新田字北、西地内	*	*	*	*	*
24	*	多賀城市 新田字六歳地内	*	*	*	*	*
25	山王通路	多賀城市 山王字山王西園地内	*	*	*	*	*
26	*	多賀城市 山王字平刈田地内	*	*	*	*	*
27	*	多賀城市 山王字西町通地内	*	*	*	*	*
28	*	多賀城市 山王字北舟坂寺、南宮字庚申	*	*	*	*	*
29	*	多賀城市 山王字西王山、中山王地内	配水管整備事業	*	平成元年 11月20日	平成元年 12月5日	*
30	高崎通路	多賀城市 留字第一丁目地内	*	*	*	*	*
31	山王通路	多賀城市 南宮字庚申、八幡地内	*	*	*	*	*
32	*	*	*	*	*	*	*
33	高原通路	多賀城市 浮島字高原地内	浮島地区公害用 道路改良工事	*	平成元年 11月27日	平成元年 12月20日	*
34	西沢通路	多賀城市 浮島字西沢71・74・51	宅地造成 (8,445m ²)	多賀城市浮島字沢前26 櫻田 建設	平成元年 11月28日	平成元年 12月15日	開発の場合発掘調査
35	市川横道跡	多賀城市 市川字南ノ池地内	道路改良工事	多賀城市長 伊藤喜一郎	平成元年 12月14日	平成2年 1月5日	57条の3提出 立会い調査
36	高崎通路	多賀城市 高崎一丁目・二丁目地内	*	*	*	*	*
37	山王通路	多賀城市 山王字山王三区、山王西園地内	*	*	*	*	*
38	西沢通路	多賀城市 浮島字西沢71・74・76	宅地造成 (6,182m ²)	櫻田 建設	平成2年 1月12日	平成2年 1月19日	開発の場合発掘調査

III 事業報告

1. 展示

(1) 今年度の展示について

当センターではこれまで年に一度企画展を行ってきたが、今年度は企画展の他に初の試みとして、前年度実施の発掘調査成果を速報的に公開した「速報 発掘された遺跡展—昭和63年度の成果報告ー」と、特別展「墨書文字 観音寺の謎—多賀城廃寺の寺名をさぐるー」を実施した。また、今年度で3回目をむかえる企画展は「古墳時代の多賀城」というテーマで、3月6日から6月3日までの期間で開催している。

速報展、特別展とも短期間の展示ではあったが、どちらも時宜にかなったものであり、特に特別展は後に詳しく触れるが、「観音寺」銘土器に関する調査が一応のまとまりをみた段階で、それを展示という形で迅速く一般に公表するという、調査機関の展示としては理想的なやり方だったと思われる。

今後も、何らかの成果がまとめた場合、柔軟にそれらを展示に反映させていくよう努力したいと考えている。

(2) 「速報 発掘された遺跡展—昭和63年度の成果報告ー」

期間：平成元年6月13日～7月9日

① 展示の目的

市内では毎年、宅地造成等のため数ヶ所の遺跡で発掘調査が行われるが、大部分は発掘後開発のため姿を消してしまう。また、出土遺物も、企画展等で使用されるものはおのずと限られ、人目に触れないまま保管されているものも多い。そこで今年度、初の試みとして、前年度に調査を行った遺跡の中から主なものを選び、各遺跡ごとに調査成果、出土遺物を紹介し、あわせて身近な埋蔵文化財に対する認識と理解を深めてもらう目的で展示をおこなった。

② 展示の内容

昭和63年度は、試掘を含めて8ヶ所で発掘調査を実施した。このうち展示を行ったのは新田遺跡第7次・8次・9次調査、山王遺跡第8次調査、高崎遺跡第7次調査分である。

各遺跡ごとに調査の概要、写真パネル、主な遺物、で構成した。

③ おわりに

前年度の調査内容を早く紹介する、といった目的から、遺物は復元していないものが大部分を占め、全体の形がわかりにくく、この点、不親切であった。参考資料を用いるなど、補足手段の必要性を痛感した。

展示資料一覧

遺物名	時代	数量	遺物名	時代	数量	遺物名	時代	数量
新田遺跡第7次調査(41点)			新田遺跡第8次調査(13点)			山王遺跡第8次調査(33点)		
灰釉陶器	古代	2	須恵器高台付杯	古代	1	土師器壺	古墳	1
緑釉陶器	タ	2	軒平瓦	タ	1	・ 梗	タ	2
ベルト飾り	タ	1	平瓦(「物」の刻印)	タ	1	須恵器壺	タ	1
青磁(越州窯)	タ	3	蓋(瀬戸産)	中世	1	・ 梗	タ	1
天目茶碗(中国産)	中世	1	碗(美濃産)	タ	1	石製模造品	タ	11
緑釉陶器(中国産)	タ	8	甕	タ	2	把手	古代	4
白磁四耳壺	タ	1	カワラケ	タ	3	土師器杯	タ	4
青磁碗(中国産)	タ	1	硯	タ	1	土師器杯(墨書)	タ	1
深皿(瀬戸産)	タ	2	曲物	タ	2	須恵器杯(墨書)	タ	1
瓶子	タ	2				須恵器壺(新田)へテ	タ	1
おろし皿	タ	2				緑釉陶器	タ	1
壺	タ	2	土師器壺	古墳	18	漆器碗	タ	1
硯	タ	1	・ 甕	タ	5	曲物底板	タ	2
香炉	タ	1	高杯	タ	6	笊串	タ	1
火鉢	タ	1	・ 杯	タ	6			
入子	タ	2	・ 梗	タ	1			
すり鉢(三ツ鱗文)	タ	1	手づくね土器	タ	10	高崎遺跡第7次調査(16点)		
すり鉢	タ	3	砥石	タ	1	合口甕棺	古代	1
甕	タ	1	紡錘車	タ	1	灯明皿	近世	1
板碑	タ	3	白玉	タ	46	古銭	タ	3
ひょうたん	タ	1	石製模造品	タ	32	すり鉢	タ	1
						カワラケ	タ	10



「速報 発掘された遺跡展」展示風景

(3) 「墨書き文字 観音寺の跡—多賀城廃寺の寺名をさぐる」

期間：平成元年7月11日～8月6日

① 展示の目的

8世紀の初め、多賀城とともにその付属寺院として建立された寺は、現在多賀城廃寺とよばれているが、由来はもちろんその名前すら古代の記録にはみえない。また、これまで行われてきた多賀城跡、寺跡の発掘調査でもその名をうかがわせるような遺物は発見されていない。

一方、多賀城周辺遺跡の調査が10年前から市教育委員会によって進められているが、それらの性格は、古代、多賀城の規制を極めて強く受けた地域＝国府城であったと推定され、多賀城を中心とした古代都市の様子が徐々にその姿を現しつつある。

そのような性格をもった周辺遺跡の一つ、山王遺跡から昭和59年、「観音寺」と墨書きされた10世紀の土器が発見された。この文字は何を意味しているのか。さまざまな角度からの検討結果、多賀城廃寺の寺名ではないかという結論に至った。

この成果をわかりやすく紹介する目的で展示を企画した。

② 展示の内容

「観音寺」が廃寺の名前ではないかと結論づけられるに至った経緯は決して単純なものではないが、その推定過程を4つの大きなポイントに絞り、各コーナーを設定した。論拠を裏づけるものとして実物資料をできるだけ用い、その他写真パネル、模型等も使用した。

<コーナー1> 墨書き土器が発見された山王遺跡

まず、「観音寺」銘土器が出土した山王遺跡の性格はどのようなものなのかを、過去8回に亘る調査成果から浮き彫りにした。多賀城南辺築地と平行する東西道路、それに直交する南北道路、掘立柱建物跡などを写真パネルで示し、役人の存在をうかがわせる石帯、施釉陶器などを展示した。

<コーナー2> 「観音寺」銘土器の発見

「観音寺」銘土器がどのような状態で発見されたか、これは鍵を解く上で大きなカギになる。土器は東西道路の近くの土塁から、200個余りの大量の土器と共に出土した。さらにこれらの土器の多くは内面に油煙の付着がみられる。こういった状況を、仏教の万燈会と結びつけて考えてみた。このコーナーでは土器の出土状況をパネルで示し、油煙付着土器を展示した。また、非常に似た状況で発見された例として、廃寺の近く、今村郷出土土器も合せて展示し、山王遺跡出土土器の性格の裏づけ資料とした。

<コーナー3> 多賀城廃寺と大宰府觀世音寺

多賀城廃寺の伽藍配置は大宰府付属の觀世音寺と同じであり、「觀世音寺式」とよばれています。多賀城と大宰府は古代の役所としては際立った存在であり、多賀城は大宰府をモデルにし

たのではないかと考えられるだけに、その付属寺院も、觀世音寺を大いに意識したであろうことは想像に難くない。ここでは多賀城廃寺の復元模型と觀世音寺絵図（室町時代のもの）のパネルを展示し、両者の類似点を示した。

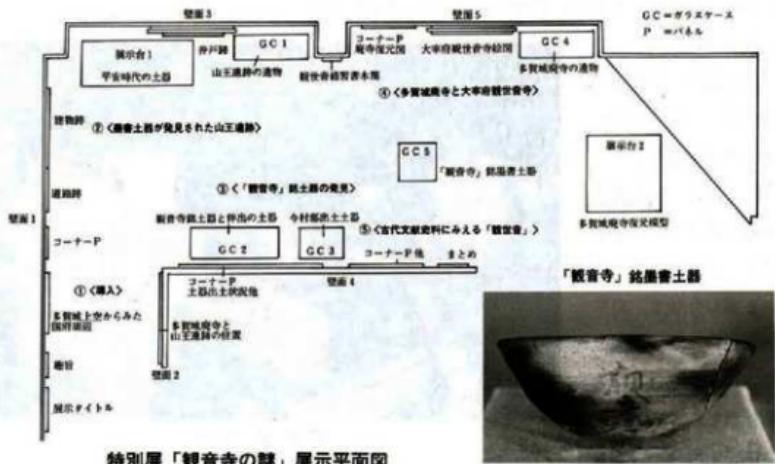
＜コーナー4＞ 古代の史料にみえる觀音寺

古代において「觀（世）音寺」という名は決して特異なものではなく、大宰府の他に出羽、信濃、山城にもあったことが記録からわかる。

古代の文献にみえる「觀音寺」の記載をパネルで示した。

③ おわりに

廃寺から約2km西に離れた山王遺跡、ここから出土した土器にかかれた寺名がなぜ廃寺とかかわりをもつのか。両者の距離を埋めるための作業は実に様々な角度から行われた。ストレートには結びつかないだけに、現在想定し得るあらゆる可能性を駆使したわけで、それはとりもなおきず、現時点での多賀城をとりまく考古学、文献史学の成果の水準を確認する作業でもあった。こういった論考の過程には理論のみで、実物資料による裏づけのできないものもあり、展示としてはやや難解な部分もあったかと思う。また、文字パネル等だけではどうしても説明不足で、職員による解説が大きなウエイトを占めたことも、今回の展示の限界を示すものであった。反省すべき点はいくつかあったが、それでも「觀音寺」の名前は記憶に止めていただけたようである。ただし、これで廃寺の正式名称が確定したわけでは勿論ない。マイナス要因も多く存在するだけに、新しい資料の蓄積をまって、将来また、その成果を展示で紹介したいと考えている。



(4) 第3回企画展「古墳時代の多賀城」

期間：平成2年3月6日～6月3日

① 展示の目的

多賀城の歴史の中で「多賀城」が設置され、栄えた奈良・平安時代の姿は、多賀城跡やその周辺の調査で解明されつつある。では、「多賀城」が創建される以前のこのあたりはどのような様子だったのか。今回の展示では市内で発見された古墳時代の遺構や遺物を通して、当時の様子に迫ってみた。

② 展示の内容

多賀城の古墳時代全体を網羅したのではなく、これまで市内で発掘調査された4～5世紀の集落跡、及び7世紀の横穴古墳、これを核に、県内の資料によって肉付けし、集落の発生、豪族たちの墓、という二つのコーナーで内容を構成した。

<導入>

古墳時代とはどういう時代か、そのイメージをつかんでもらうため、これまで県内で発掘された、代表的な遺物をガラスケースに展示した。また、年表によって古墳時代をはさんだ前後の歴史の流れ、日本の中に於ける東北の古墳時代の特徴等を見ていただくようにした。そして、県内の古墳の位置を地図上に落とし、分布状況を見ることによって、次の律令体制のもとに於ける、宮城県内の地域格差をも暗示させるようにした。その他、さまざまな古墳の形態を写真パネルで示した。

<コーナー1> 集落の発生

市内における古墳時代の集落は、新田、山王両遺跡で発見されている。自然堤防上に発生した集落の様子を、すまい、生活の道具、まつり、の小項目に分けて展示した。

(すまい)

自然堤防上の集落の様子を、イラストパネルを用いて表現した。さらに新田、山王遺跡付近を航空写真で示すことによって、イラストと重ね合せて、自然堤防上に集落が発達し、現在に至っていることを強調した。また、竪穴住居のカマド付近を



展示風景

実大で復元し、土器も並べて臨場感を出した。なお、カマドを復元するにあたっては、群馬県子持村黒井塚遺跡で発見された資料のデータを参考にさせていただいた。

(生活の道具)

新田、山王遺跡出土の土器を展示台に置き、実際に手に取って見てもらえるようにした。さらに農作業あるいは土木工事にも用いられた木製品（スキ、クワなど）を展示し、あわせてそれらを使った農作業の様子をイラストで示した。

(まつり)

集落跡からはまつりに使ったと思われる須恵器、石製模造品が発見されている。石製模造品の出土状況を実物を使

って再現し、模造品の製作過程を、順を追ってイラストで説明した。また、この時代、朝鮮半島からその技術が伝えられた須恵器は、日常生活の道具としてより、まつりの道具としての色彩が濃かった。窯を用いて焼かれる須恵器の焼成の状態をイラストパネルで示し、市内外の集落跡あるいは窯跡から発見された須恵器を展示了。

<コーナー2>

豪族たちの墓

多賀城市周辺には7世紀ころ、横穴式石室をもつ古墳や、横穴古墳が数多く作られている。古墳からは埋葬された豪族の地位を示す



〈コーナー1〉集落の発生

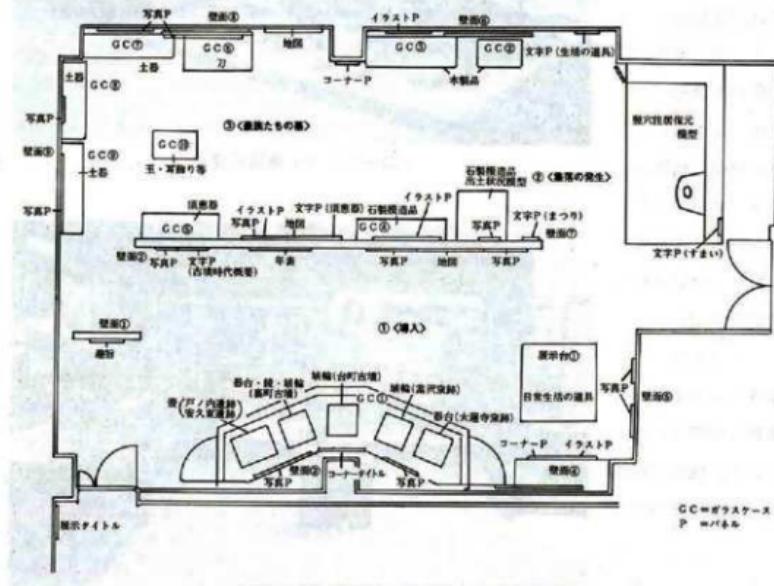


〈コーナー2〉豪族たちの墓

ような副葬品も発見され、中でも大代横穴古墳からは、最北の出土例として貴重な、金銅装頭椎大刀もみつかっている。これら副葬品、あるいは墓前祭で使用されたと考えられる遺物から、多賀城が造営される直前に、この地を治めていた豪族の姿を感じてもらおうとした。

③ おわりに

今回は古墳時代全体を通観した展示ではなく、あくまで市内の発掘調査で得られた資料に基づいただけに、時期的には4～5世紀、7世紀のものに限られた。そのため、どうしても途切れた印象になってしまったことは否めない。また、県内全域においても、古墳時代の集落の発見は徐々に増えてはいるが、古墳そのものの発掘はそう多くないため、パネルに頼らざるを得ない面が多く、その点でも、物足りなさを感じられたかもしれない。ただ、資料不足を承知であえて今回展示を行った結果、多賀城がこの地に設置されるに至るさまざまな要因の一端を明らかにできたのではないかと思う。これから先、市内に於いてもまた、宮城県全体でも古墳時代の資料は確実に増えていくであろう。近い将来、それら新しい資料を用いて、さらに充実した展示を行い、古墳時代の多賀城をより詳しく解き明かし、ひいては前代からの流れの中から、改めて多賀城設置の背景等を探っていきたいと思う。



企画展「古墳時代の多賀城」展示平面図

2. 普及活動

(1) 現地説明会の開催

「山王遺跡第8次調査について」	平成元年7月22日	担当者 相沢
「新田遺跡第11次調査について」	平成元年9月30日	担当者 千葉
「山王遺跡八幡地区の調査について」	平成元年11月18日	担当者 石川・石本

(2) 館外における普及活動

期 間	内 容	対 象	依頼機関	担当
元. 6.11 7.21 7.25 ~7.28 7.26 9.20 9.28 10.17 10.19 10.25 10.31 11.10 11.15 2. 3.30 3.31	史跡めぐり 山王遺跡現場見学 児童校外学習(山王 遺跡発掘現場) 史跡案内 史跡めぐり タ タ タ タ タ タ 史跡案内 史跡めぐり 史跡案内 史跡案内 企画展「古墳時代の 多賀城」紹介	新婦人の会 郡山班 新採、転入教職員 5・6学年児童 東北財務局 丸山社会教育学級 仙台歴訪会 血压学習会 福島市交通安全母の会 多賀城中学校文化部 埼玉県運管入間支会 つなぎの会 静岡県伊豆長岡町 平成2年度新規採用職員 (みんなの輪)	新婦人の会 市教委 多賀城八幡小学校 市財政課 市広報課 仙台歴訪会 市保健衛生課 福島市交通安全母 の会 市広報課 市運管 つなぎの会 市総務課 市総務課 宮城テレビ	滝川 高倉 石川 高倉 滝川 高倉 千葉 高倉 滝川 タ 高倉 滝川

(3) 講演会などへの協力

期 間	題 目	会 の 名 称	主 催 団 体	担当
元. 7.15 7.29 8.24 8.31 10. 11.11	多賀城の歴史 多賀城周辺の遺跡 土器づくり 多賀城の歴史 観音寺の謎 多賀城市の歴史	丸山社会教育学級研修 東北歴史資料館開放講座 わらすこふるさと学級 丸山社会教育学級研修 市民教養講座 平成元年度新任者研修	丸山地区社会学級 東北歴史資料館 市中央公民館 丸山地区社会学級 市中央公民館 宮城県教育研修セ ンター	高倉 タ 相沢 高倉 タ タ
12. 2	市川橋遺跡第7・8 ・9次調査	平成元年度宮城県内発掘 調査成果発表会	宮城県教育委員会	石川
12. 3 12. 6 7	山王遺跡第8次調査 西方館跡出土遺物及 び現場測量について の指導	タ	三春町教育委員会	相沢 千葉
2. 2.17	山王遺跡	第16回古代城柵官衙遺跡 検討会	古代城柵官衙遺跡 検討会	相沢

(4) 資料の貸し出し

依頼機関	目的	貸出期間	資料名
宮城教育大学附属中学校	社会科の資料として	元. 5.20 ～6. 2	「里浜貝塚のくらし」「米づくりのはじまり」(展示室内ビデオ)
石巻文化センター	「三陸の亀ヶ岡式土器」	元. 6.16 ～8. 6	永根貝塚出土皿形土器・小形壺 壺 各1
福島県文化センター	「鉄の歴史」	元. 7.～ 10.13	柏木遺跡製鉄関係写真パネル・ 解説パネル・復元図
東北歴史資料館	「多賀城と大宰府」	元. 8. 8 ～10.22	山王遺跡出土「觀音寺」銘墨書土器、 柏木遺跡出土羽口、鉄滓一括
仙台市博物館	「文字資料による仙台平野」	2. 2.24 ～4. 8	山王遺跡出土「觀音寺」銘墨書土器
村田町教育委員会	博物展示会	2. 3.16 ～3.23	新田遺跡第9次調査土器出土状況写真パネル

IV 事務報告

(1) 平成元年度展示室入館者数

月	一般	高校	小・中	招待券	免除	視察	その他	合計(人)	開館日数
4	232	2	63	2	0	15	53	367	26
5	143	1	31	0	287	52	26	540	26
6	238	0	147	2	0	51	122	560	26
7	408	4	66	23	35	152	89	777	26
8	183	7	82	35	168	65	55	595	23
9	263	0	207	7	19	45	24	565	26
10	337	2	28	1	53	96	19	536	25
11	324	8	50	0	0	68	16	466	25
12	81	2	33	0	140	0	10	266	23
1	145	1	43	0	16	7	46	258	23
2	96	2	23	0	0	30	11	162	24
3	211	2	84	7	633	83	28	1,048	26
年計	2,661	31	857	77	1,351	664	499	6,140	299

(2) 平成元年度予算概要

(単位:千円)

	事業名	当初予算額	摘要
1	埋蔵文化財緊急調査に要する経費	6,000	山王遺跡ほか発掘調査費(国庫補助事業)
2	史跡のまち発掘調査に要する経費	2,783	試掘調査費、発掘出土遺物整理費、年報作成費
3	埋文センター普及、啓蒙に要する経費	5,005	埋文センター運営諸経費、企画展等展示開催費
4	鉄製、木製遺物の保存処理に要する経費	1,000	発掘出土遺物保存処理費(国庫補助事業)
5	発掘調査受託事業に要する経費	36,442	開発行為に伴う発掘調査費(市川橋遺跡等5件)
計		51,230	

V 講演会報告

特別史跡多賀城跡附寺跡発掘調査30年記念講演会

期日：平成2年3月10日

会場：多賀城市文化センター小ホール

内容：演題「多賀城発掘30年の成果と課題」

講師 前奈良国立文化財研究所長 坪井清足氏

〈講演要旨〉

只今ご紹介いただきました坪井でございます。多賀城の保存という問題に関しまして、相当な年月が経ったということ、我ながら驚いております。この多賀城の保存について、地元の地権者の方はもちろんですが、私にとって忘れられない二人の方が非常に大きな力を發揮されたと考えますので、その辺の話から入ってみたいと思います。

第1番目は言うまでもなく、東北地方において歴史時代の考古学というものを確立された伊東信雄先生であります。昭和14年に初めてお目にかかる以来、いろんな機会に伊東先生に私共は随分お世話になりました。

昭和30年に先生によって始められた陸奥国分寺の発掘調査は、全国で初めて国分寺伽藍の全体像を明らかにした、画期的なものでした。この時の調査成果をもとに、そしてこの調査で古代建築の発掘技術をマスターした伊東先生及びその下に集まってこられた方々によって多賀城の調査が始まったと言えようかと思います。昭和36年から廃寺の調査、そして38年からは多賀城内城の調査が始まり、その結果多賀城では4期にわたって変遷があることなど、8世紀初めから10世紀にかけての様子が、発掘によって非常に詳しくわかってまいりました。多賀城の具体的なイメージというのは全てこの38年以降の発掘調査によって構築されたものです。東北で伊東先生の前に歴史時代の考古学について研究された方が全くおられなかつたわけではありませんが、こういう大きな遺跡を系統的に発掘するというシステムをお作りになったという点では、先生の右に出られる方はないといってよいでしょう。

お二人目はここが町であったこ



ろの最後の町長をされた大場さんであります。大場さんには文化庁の音頭で昭和41年、全国史跡整備市町村協議会が発足した際に中心になって動いていただき、副会長もやっていただきました。多賀城跡のような史跡をどうやって開発から守って保存していくかといった場合、土地を公有化する以外に手立てはないわけで、そこで、国から補助金をもらって土地を買って開発から守ろうということをするために全史協が作られたわけです。このお二人の先駆者、こういう方のご協力があったから今日の多賀城の姿がある、というふうに私は考えております。

発掘のほうですが、奈良の法隆寺は西に塔、東に金堂があり、それぞれ建物は南面しています。塔と金堂の位置を逆にすると法起寺になります。ところが多賀城廃寺は塔と金堂が向いあっており、これが非常に大きな特徴であります。通説的な古代寺院の伽藍変遷によれば一番古いものは塔、金堂、講堂が南北に一直線に並ぶ四天王寺でみられるタイプで、その後塔と金堂が東西に並び、ついには東大寺のように塔が伽藍の外へ出てしまう、ということになります。ところが、日本で最初に建てられた寺である飛鳥寺を発掘しましたところ、金堂が三つあってその真中に塔が立つという、独特の伽藍配置であることがわかりました。さらに7世紀の終わりから8世紀にかけて大宰府と多賀城で造られた觀世音寺は、塔と金堂が向い合う伽藍配置になっています。大宰府觀世音寺は天智天皇の発願によるもので、同様に川原寺、大津宮の南滋賀廃寺も天智天皇と係わる寺ですが、これらはみな塔と金堂が向い合う形になっています。ですからどうも天智天皇から始まったというか、唐の影響を受けた寺はこのようなスタイルをとるのじゃないか、その東北版が多賀城廃寺じゃないかというふうに考えております。このように多賀城廃寺一つとっても随分問題があるということがおわかりいただけるかと思います。

一方、多賀城跡のほうであります、発掘が始まって30年ということですが、昭和44年からは多賀城跡調査研究所ができ、以来20年、宮城県としては相当大きな組織を作ってやっていたんであります。まだ発掘面積は全体の7%だということで今後いったいどのようにして掘っていくのか、もう一度県、文化庁としてもどうあるべきかお考えいただきたいと思います。

また多賀城は発掘の結果、4期の変遷がとらえられましたが、これについてもう少し一般の方々にわかるようなものを何か、どこかで作れないだろうかと考えます。4回の変遷があるにもかかわらず、政庁の建物配置は基本的には変わっておりません。政庁ではたとえば蝦夷の酋長なんかがいろんな貢物を持ってやって来た時、儀式をやって見せ、その人たちに帶金具、バンドをやるわけです。これは下は銅から上は金まで位によって材質が異なります。奈良時代の終わり頃になると銅が石にかわります。石帯とよばれ、こういうものが発掘で出て来ますとそれをバンドに使うことを許された役人がいた、ということになり、破片でも出れば多賀城に勤務した役人が山王付近の、道路沿いに屋敷を構えていた証になります。宮城・岩手県境あたり

のお墓からは、主に銅の帶金具がたくさん出てきます。これは大和政權の出先機関である多賀城へ貢物をもってやってきた蝦夷に勅章代わりに位を示すベルトを与えたためであろうと考えられます。そうやって、中央につき従っているかのような顔をしていた蝦夷の人達ですが、支配の強化によって反乱を起こします。780年の伊治公告麻呂の乱がその最も顕著な事件で、多賀城も焼き打ちにあうなど大きな被害をうけます。万葉の歌人で有名な大伴家持が多賀城に来るのもこの頃です。この家持は父親の旅人に従って少年時代、大宰府におりましたので、奈良時代に大宰府と多賀城の双方を知っているという珍しい人ですが、そういう歴史的な事実とこの遺跡の変遷というものを組合わせて考えてみるといろんなことをみなさん想像していただけるんじゃないかなと思います。

多賀城の城内において、主な建物の性格はほぼつかめてきておりますが、そこにはあまり生活のにおいがしない。そういう点で問題点の第1にあげられるのが、いったい多賀城に関係していた人たちが8世紀にどこに住んでいたのかということです。最近では研究所だけではなく、市の教育委員会でも随分あちこち発掘していただいておりますが、8世紀のにおいのするものはなかなか出てきません。これは実は大宰府も同じで、かつての条坊にあたる地域を太宰府市が発掘しておりますが、平安時代後半以後のものはわりに出てくるんですが、平安時代以前の古いものは分らない。ただやはり内部にあたる都府楼そのものの変遷はわかっております、7世紀に掘立柱の役所が建てられ、8世紀初めに礎石の建物に造り替えられ、これが藤原純友の乱の時に焼き滅ぼされます。乱後再度建て直された建物の礎石が現在太宰府でみなさんが御覧になっているものです。発掘前は純友の乱後大宰府はそのまま再建されず滅びてしまったんだと考えていたんですが、決定的な打撃を受けたんじゃなく、また建て直されたことが調査によって判明したわけです。これまでは文献資料の解釈のみから律令制度の推移が通説的に説かれてきましたが、発掘によってここまでこういう風に言えるということが確実になってきました。これは非常に大事なんじゃないかと思います。

多賀城の成果がある程度あがった時点で、仙台市で郡山遺跡というものが発見されました。郡山遺跡で出てきたものは多賀城とは非常に性格が違います。例えば郡山遺跡では周囲を囲む施設は角材列ですが多賀城は築地塀といったように全体の構えが非常に違ってる感じがするわけです。この築地塀、版築というやり方で造りますが、藤原宮の場合はこれがまだありませんで、710年に平城宮が造られた時に初めて導入された技術だと言えます。このように多賀城とは非常に違う様相をもつ郡山遺跡が多賀城とどういう関係にあるのか、いろいろな説が発表されておりますが、これだというものはまだないようで、将来の問題になろうかと思います。

さらに最近になって阿武隈川の河口付近の三十三間堂遺跡というものが発掘されました。倉庫がたくさん並んでおり、郡家ではないかと考えられています。古代の税金は租庸調と呼ばれ

ますが、庸と調は都へ運ばれます。この都へ運ぶ庸、調に都家で付札をつけるわけですが、平城京では各国から運び込まれた調の付札がたくさん出てきます。調というのはそれぞれの国の特産品ですが、東北地方のものは一切出できません。これは東北地方で集められた調は東北の中で使われたためです。今まで都では東北の実態を知る手掛りがなかったわけですが、現在では多賀城をはじめ東北各地から木簡や漆紙文書が発見されるようになりました。これは古代の生活をそのまま記録したものですから、非常に有効な資料があります。

これら発掘調査の成果をみると、これまで中央政権が徐々に北へ進出していく、同心円的に勢力が浸透していくと考えられていたものが実はそうではなく、二歩前進一步後退のようなことを繰返しながらだんだん北へ進んでいったと考える方がいいんじゃないかなという気がします。

最後に触れておきたいと思いますのは、多賀城市も非常に大都会になってまいりました。急速に開発が進む中で都市計画事業をいかに整合性をもって推進させていくかということが大きな課題となってくるわけです。その中で多賀城の指定範囲はどんどん増え、相当広い面積を保存していかなくてはならなくなってきております。しかし逆に言うとこれだけの面積の都市の中にこれだけの緑地がある、今後永久に残されるということでもあります。日本では都市全域の面積に対して公園面積が0.5%ぐらいのが普通で、ここのように10%を越える可能性があるというのは都市本来が持つ公園面積としては理想的な姿であります。市の公園事業でこれだけの面積を獲得したのではなく、他の行政の要請によってこれだけの緑地がおのずと義務付けられているということは、この地に住む方にとって緑に接する機会を史跡によって与えられているんだというふうに考えられないでしょうか。とすればそういう緑地を市民生活にいかに有效地に使うべきか、市民一人一人がもっと積極的にこの問題に対して発言し、また市のほうでもそういうものをきちんと受けとめていただきたいと思うわけであります。市民の方からの提言というものを生かした町づくりがもっと盛んになればいいんじゃないかなと思います。

常々文化財の保存ということについて思うんですが、日本全体の学校教育の中で開発に関連した学科はどこもありますが、文化財を守るほうの学科というものは本当に指折って数えるほどしかございません。そうすると、一億の重圧にごく一部分の人間が立ち向かってもなかなか保存がうまくいかないですから、何とかして文化財に関心を持った方を一人でも多く増やしていきたいというのが我々の念願であります。これから世の中で一番求められるのは生活に対するアメニティー、快適性ということです。この快適性を守り、発展させていくこういう場合、我々の先祖がこの日本にどのように適応し、文化を発生させたか知る必要があり、その手掛りは歴史遺産の中にしかありません。ですからよりよい未来を拓いていくためには、やはり史跡として考えられているようなものをより多く守って、将来の国民のために残しておくという義務が我々にあるんだとおもいます。

多賀城市埋蔵文化財調査センター職員録

(平成2年3月現在)

所長	斎藤	一司
主任研究員	高倉	敏明
研究員	滝口	卓英
*	石川	俊弥
技師	千葉	孝弥
*	石本	敬利
*	相沢	清利
嘱託	鈴木	久夫
*	滝川	ちかこ

多賀城市文化財調査報告書第25集

年報 4

平成2年3月31日 発行

編集発行 多賀城市埋蔵文化財調査センター
多賀城市中央二丁目27番1号
電話 (022) 368-0134

印刷 渡辺印刷
塩釜市旭町17番13号
電話 (022) 364-3161
